

ヘーラクレイトスにおける一者

はじめに

ヘーラクレイトスにおける一者

イオーニアのエプエソス (Ephesos) の人ヘーラクレイトス (Hērakleitos, 前五〇〇年頃) は万物のアルケー (ἀρχή 元のもの・始源) を火とし、万物流転 (ταῦτα πάντα) とか「戦いは万物の父」という言葉で知られる哲学者である。彼における一者、つまり一つであるものを軸にその吟味を通して彼の思想の根幹に迫ってみたいと思う。とはいっても難解で知られる彼である。「彼らはあるとあらぬが同じであり、かつ同じでない」と見なす。彼らにはあらゆるものについて逆向きの道がある」(Parmen. Fr. 6) とエレアのパルメニデース (Parmenides, 前五一五頃〜四五〇年頃) はヘーラクレイトス一派を批判している。彼の思想は論理的・合理的には到底理解できない代物なのだ。無論でたらめというわけではない。背後に深い体験が横たわっている。アテーナイのソークラテース (Sokrates, 前四六九〜三九九年) は彼の書物を読んで「私に理解できたところはすばらしいし、理解できなかったところもそうだろうと思う。ただし、この書物は誰かデロス島の潜水夫を必要とするね」と言ったといわれる (Diog. Laert. = D.L. II 22)。彼は古来謎をかける人 (αἰνιστής) とか闇の人 (σκότεινός) と呼ばれてきた (D.L. IX 6, Suda)。

永井康視

ところが他方、彼に寄せられた次のエビグラム(寸鉄詩)もある。

エプエソスのヘーラクレイトスの書物を、その巻物の真ん中まで急ぎ縮いてはならぬ。それは極めて踏破しがたき徑。暗々たる光なき闇だ。されど、密儀にあずかりし者、汝を導き入れるならば、その徑は明るき太陽よりも光り輝くものとなるらん (D.L. IX 16)

と。つまり彼の思想には深く密儀に関わるものがある。事実ヘーラクレイトスの言葉に

行列をつくったり、性器の賛歌を歌ったりするのが、もしディオニューソスのためでなかったら、この上なく恥知らずな所業であったらう。しかし彼らが狂乱して酒樽の祭りを行っているディオニューソスはアイデース(冥府の王)と同じなのだ(断片一五)

とありディオニューソスの密儀の存在意義を認めている。そして

それ故に、ヘーラクレイトスがそれら(密儀における諸行為)を「治療薬」(θεῖον)と呼んだのも当然である。恐ろしい病を癒し、生誕のときに背負った災患(トラウマ)を除去して魂を健全なものにしてくれるはずののだからだ(断片六八)

とある。彼は、神や絶対的なものと自己とが体験的に接触、融合することに最高の価値を認め、その境地を目指して行為や思想の体系を展開させる人、神秘家なのである。だからディオニューソスの密儀における酩酊と狂乱、血のしたたる生肉をかじる行為などを不浄なもの

(断片一四) 恥知らずなもの(断片一五) としながらも、そこに何らかの意義を認めるのは、密儀における半演劇形式での神の苦しみ、死、復活の表現が神と自己との一体化を体験させ、魂の浄化に役立つものと見ていたからだと思われる。彼は魂の浄化を求め(断片六九參照)、魂をもつて健全に思慮すること(*ganoosein*)を最大の徳性とし(断片一二)、魂の抜け出た「屍体は糞尿よりもなお放り捨てるべきもの」(断片九六)としているのである。

ところでヘーラクレイトスを含む前ソークラテース期の思想家達を自然神秘主義との関連から考察したすぐれた論述に井筒俊彦『神秘哲学 第一部 自然神秘主義とギリシア』(人文書院一九七八年)がある。

私もヘーラクレイトスを神秘家として考察するが、上記のものに加え私自らの体験を経て読みとり得た彼の思想をより具体的より明瞭に描き出してみたいと思う。

一 自然神秘主義

1 賢者

初めにヘーラクレイトスの言葉を生み出した歴史的背景を鳥瞰しておきたい。

紀元前七世紀から六世紀にかけては、オデュッセウスの漂流物語からも窺えるように、ギリシア民族は海を越えての活発な活動を展開していた。その海上貿易を背景に新興貴族が台頭し、旧来の土地貴族によって支えられた王制が崩壊し、土地や財産を失って放浪する者や、また貧困に喘ぐ者、そして都市国家の形成期にも当たり、独裁者あるいは調停者が出現し、変化の激しい緊張した時代であった。『イーリアス』に見られる太古

の英雄の武勲を神々とともに謳歌する叙事詩的世界は移り、『オデュッセイア』に見られるような、現実の多様な苦難を特定の女神アテーネーの庇護のもとに戦い抜く英雄オデュッセウスの運命の中にも見られるように、現実への眼が開かれ、いまや現実生活の諸相を個々人自らの眼で厳しく見極めようとする「我」の自覚の時代、そして叙情詩の時代となっていた。

そこには現実のはかなさや無常を嘆く厭世の空気が漂っていた。青春は夢のように短く、醜くもいたましい老年がたちまちに訪れて来る。だからその好機が過ぎれば生より死こそが望ましいとイオーニアのコロブオーンの人ミムネルモス(Mimneros 前六三〇年頃)は歌う。また、メガラのテオグニス(Theognis 前五四四年頃)の名で伝わる詩句にも、人にはそれぞれ禍いがあり、ゆるぎない幸せを持つ者は誰もいない。一番いいのは生まれないこと、生まれた上は、できるだけ早くヘーデース(冥府)の門をくぐることに。そしてまた、この混沌としたはかない世では、この先何の良い目も望めない。死んだら何もかもお仕舞いだ。今この青春を楽しんで大いに遊ぼうといった、厭世的空気の中で一種の利他的快樂主義を表明するものもある。

しかしこのような厭世的風景の中にあつて、その無常なるものを超えて永遠に価値あるものを、また利他的な快樂をではなく永遠の歡喜を求めようとする動きも台頭し始めていた。例えば、富や権力、あるいは青春や老年といったものは、無常なるが故に価値のないものとして、徳と正義を永遠に価値あるものと見なす者に、はやくはポイオーティアの農民詩人ヘーシオドス(Hesiodos 前七〇〇年頃)があり、またアテーナイの立法家ソロン(Solon 前六四〇頃～五五九年頃)があつた。また叙情詩人の中にも、勝つて喜ぶも負けて嘆くも度を過ぎずなと歌うパロス島出身のアルキロコス(Archilochos 前八世紀末～七世紀中葉)や、怒りが胸内に広がる時無駄口をたたく舌を見張っていなさいと歌うレスボス島生まれのサップオー(Sappho 前六一二年頃)のような、現実をそのままに受け入れて、それを醒めた眼で見つめる賢者の風格のある人物も現れた。また、現実の生における歡喜、魂の浄化、永遠の生を約束する多くの秘教、オルプエウス教団、エレウシース教団、ピュータゴラス教団なども出現した。

このような中に賢者(sages)と呼ばれる人達が多く輩出した。最初に賢者と名指されたミレイトスのタレース (Tales 前六三六頃〜五四六年頃) やプリエーネのピアース (Bias 前五七〇年頃)、アテーナイのソロン、スパルタのキローン (Chilon 前五〇〇年頃) などがそうであるが、彼らはまた神秘家であって、自然神主義的体験を通して森羅万象そのものの中に愛や秩序正しさや正義があると観照した (cf. Plat. Grig. 508 等)。彼らが相会してデルポイに赴きアポロン神に奉納した「汝自らを知れ」や「度を過ごすなかれ」の銘文は有名であるが、ヘーラクレイトスもまた「私は私自らを探求した」(断片一〇二)と言明する。彼もまた賢者の伝統を受継ぐ者なのである。

2 いまここに醒めてへある

さて、井筒俊彦氏は、前ソークラテース期のイオーニア・イタリアの代表的な思想家達はいずれも自然神主義の洗礼をうけて出発したとするが、その具体例については殆んど言及がない。本論はその点をやや具体的に考察したい。

まず自然神主義的体験は賢者の言う沈黙(silent)の状態において見られる。「沈黙においてコスモスを獲得であろう」(ピアース Dialo. Kranz-DK. 10) と。つまり思考(thoughts)が絶え理性(reason 思慮・分別)が消滅して沈黙(瞑想)の状態にあるとき、外なるものと内なるものが一つとなり、秩序ある宇宙世界(コスモス)と融合・一体化して、そこに神的な叡智(ヌクス・ロコス)に触れる、そしてその声を聞く(チャネリングと呼ばれる)。賢者は言う。「ヌクスを導き手となせ」(ソロン D. L. 160)、「汝の舌をヌクスより先に走らせるな」(キローン DK. 10)

と。またヘーラクレイトスが「ロコスに聞いて」(断片五〇)とか「ノオスの助けを受けて語らんとする者は」(Theodor Lehrs) (断片一四)とか「自然本来に耳を傾けて」(断片一二二)と言う場合、いずれも沈黙を前提に初めて可能な事柄なのである。そしてこの沈黙の体験は古今東西その基底に相通するものがあり、神秘家ヘーラクレイトスを理解するに当って、アテーナイのすぐれた形而上学者でありそれ以前に醇乎たる神秘家であったプラトーン (Platon 前四二七〜三四七年) の叙述を参考にすることも許されることなのである。

さて、自己自身を探求しへ私なるものへが現れて感じられるためには理性(reason)ではなく感覚(feeling)が最初の要因になるとインドの神秘家ラマナ・マハリシ (Sri Ramana Maharshi 一八七九〜一九五〇年) は言うが (Feb. 1936) 我々もまずプラトーンの感覚についての叙述の考察から始めたい(括弧をもって注解を差し挟む)。

「感覚には我々の目や耳や、その他の諸感覚(顕在意識)五感を通しての働きだけでは十分でなく、そこに魂(内在意識)無意識・潜在意識・超意識の働きがなければならぬ」(cf. The 184th p.)。つまり「外から来るいろいろな動きが身体を通り抜けて魂にぶつかる場合、それを一括して感覚と呼ぶが」(cf. The 186)、「外から来た動きが身体の中で消滅してしまつて魂まで浸透しない場合がある。そんな場合、身体の諸器官は外からの動きによって振動を受けるが、魂は何の変化の影響も受けないから、その事柄については「うっかり忘れた」ということになって思い出しもしない。そのようなとき実は忘れるべき記憶もまだ生まれていなかったのであるから、「うっかり忘れた」というよりも「感覚なし」と言う方が正しい」(cf. Phil. 33DE) と(例えば、見てはいるが、意識がそこにはない場合、いてもいない、ということになって、実は見ていないし、覚えていない、断片三四参照)。

他方、「魂と身体とが一つの情態変化の中に共同の形で置かれていて、

共同的にまた動くとき（肉体的諸器官にそなわる肉体的、感情的、知的諸機能の全てが一つになって同時に働き、さらにそこに魂（意識）醒めた意識）と身体的諸機能とが共同に動くとき、その動をまた感覚と呼ぶ」（cf. Phib. 34A）。この感覚は「想起」することを可能にする「記憶」を生み出すもので、**真実**「**た**についての知（*rectitudinem*）に至るものであるが、プラトーンはそれをして「魂に捉らえる」という表現を用いて「一度魂に捉えさえすれば忘れはしないか」といった恐れは全くない」（Epist. VII 344D）と言っている。

このような真実に触れ得る感覚は一般には理解し難い。例えば大火に巻き込まれるとか、強盗に襲われるとか、深い渓谷に転落するといった危急の場合にときに体験する。そんな場合、身体の痛み・痙攣、心の不安・恐怖、成り行きへの予測・配慮という身体的・感情的・知的諸機能が同時に働き、まるで野獣が危急の場にあつて身構えている時のような、全身全霊の、或いは魂だけになっているような感覚、それは、どこか一つの機能の集中・緊張ではなく、全機能が同時に全開の状態にあつて一瞬々々の些細な変化・動きを一つとして見逃さない醒めた意識がそこにある。それはほんの二三秒の出来事であるのに十分も二十分もそれ以上も経た体験が残る。それを忘れることは決してない。このような状態をヘーラクレイトスは「醒めている」と言う。

醒めている者たちには一つの共通のコスモスがあるが、眠っている者たちは、それぞれが自分だけのものに帰ってゆく（断片八九）
 そういうことには多くの人達はぶつかるとはぶつかつても、それらしい思慮を働かすことなく、教えられても分からず、自分だけの想いに耽っている（断片一七）

と。醒めている者に一つの共通のコスモスがあるとは、賢者の言う、沈黙においてコスモスを獲ると同義で、醒めている者は沈黙の状態にある者でもあるのだ。その時コスモスと一体化し、コスモスの持つ神

的叡智に触れ、また真実に触れる。他方眠っている者（大多数者）は神

的叡智はそこにあるのに、それと気づかず、それらしい（神的叡智にそつた）思慮を働かすことなく、個々の私的な思惑に耽ると。さらにプラトーンは言う。
 「我々は身体により感覚（五感）を通じて生成（外的諸現象）と関わりを持ち、魂（醒めた意識）により「理解」（*λογισμός*）を通じて「真の存在」（*τὸ βρασιονότιον*）と関わりを持つ」（Soph. 248A）と。ここで真の存在は「真実在」とは、真の意味において「ある」もの、真実（*ἀληθεια*）と呼ばれるもので、「いまここ」にあるものである（なぜなら過去は既に過ぎ去つて存在しないし、未来は未だ来らずして存在ではないから）、つまり真実在とはいまここに「ある」（*being*）すべてを指す。プラトーンも「我々はあつたとも、あるとも、あるだろうとも言っているが、正しい言い方ではただ「ある」だけがそれに該当する」（Ti. 37E）とある。また次のようにも言う。

「魂ができるだけ身体に別れを告げて（身体的な顕在意識をできるだけ離れて）、ただ自らにおいてのみある魂そのものとなり（内在意識・内なる大いなる自己・ハイアセルフそのものとなって）、ひたすらに存在そのもの（*τὸ εἶναι*）に至らうとするとき（ひたすらにいまここにあるとき、言葉を交えて言えは「永遠の今」にあるとき、つまり思考が絶え理性が消滅して、まさに沈黙の状態にあるとき、そのときにのみ「いまここ」にあり得るからだ。「いま私は何何だ」と言ったその瞬間に既に過去になっているのであるから、いまここには判断・批判・思考・理性の入り込むスペースはない。そのとき）（つまり直感とかインスピレーションといった形で）「理解の働き」（*λογισμός*）は最も美しい」（Phd. 65C）と言う。更にこのような理解が蓄積され深められつ（*σολοζοζοζός*）真実在についての知エビステメーとなり（cf. The 186D, Epist. VII 341C）、「魂が真実にしてあるもの（*ἀληθεὴς τε καὶ τὸ εἶναι*）の照らして出づること（つまりいまここ）しっかりと据えられてあるとき、知性によってそのものを認識し、ヌッスを持つ（*νοῦν ἔχειν*）状態になる」（Resp. 508D）と言う。

つまり、真実在（真実）は今ここに在り、自己自身（魂）が今ここに

醒めてへあるとき、真実に触れる。そこには思考・思念が動かず、直感・インスピレーションの形をとって真実の理解に至る。つまり宇宙世界に遍在する神的叡智ヌゥスを持つ状態になると。ヘーラクレイトスに次の断片がある。

博識はノオスを持つこと (*Polos Etesa*) を教へはしない。もしそうだとしたら、ヘーシオドスにもピュータゴラスにも、また更にクセノプアネーラにもヘカタイオスにも教へたであらうから (断片四〇)

と。ここに挙げられたピュータゴラスをはじめとする当時の碩学たちは、博識ではあるがノオスを持つに至っていないという。ノオス (*Nous*) はヌゥス (*Nous*) と同語であり、賢者の言葉に「神はコスモスのヌゥス (宇宙世界を秩序正しくあらしめているのは神のヌゥスだ)」 (タレーズ DK. II A23) とあり、ノオスを持つは自分自身が沈黙において醒めてへあるとき神的叡智に触れ真実の理解に至ることであったが、他方博識は、(いまこの自分自身ではない) 他者から学び取った (いまこの現在のものではない) 過去の知識の蓄積であって、永遠の今に醒めてある状態において獲られる理解の蓄積ではない。ロシアの神秘思想家グルジエフ (G. I. Gurdjieff 一八七七~一九四九年) も知識 (*Knowledge*) と理解 (*Understanding*) は別個のもので、知識だけを増せば理解が深まるということはない。理解は知識と存在へある (*Being*) との関係に依存して、理解は知識と存在との結合の結果だと言っている。すなわち博識は、過去の、今この自分自身によるものではない、つまり真実ではない、虚偽の知識の蓄積であるから、ヘーラクレイトスは、博識のピュータゴラスを、その博識のゆえに「うそつき」の元祖 (*controversial deities*) だ (断片八一、二二九) と呼んでいる。つまりヘーラクレイトスは、当時の碩学の殆んどは未だ觀念の中に生きていて、今ここに醒めた状態

で自己自身を見つめて生きてはいないと見ていたのであろう。彼は醒めている状態を更に次のように言う。

醒めているときに我々が見る限りのものは死であり、眠っているときに見る限りのものは眠りである (断片二一)

と。永遠の今に醒めてへあるとき、一瞬々々に移行行くもろもろの動を感覚する。今あると見るその瞬間に新たな今に転じて、今存在したものは次の今にはもはやない。見る限りのものは死なのである。

同じ川に二度入ることはできない……分散し、また寄り集まる、寄り来たり遠去かる (断片九一)

同じ川に入って行く者に別の、また別の水が流れて来る。しかし魂もまた湿ったものから蒸発しているのである (断片二二)

と。川は同じでも瞬間々々に流れて来る水は入れ代わって同じではない。川が同じでないとともに、それを感じている魂 (意識・感覚) も変化して同じではない。ヘーラクレイトスの魂は永遠の今に醒めてあって、瞬間々々に移行行く諸事象を脳裏に一つ一つしっかりと焼き着けてゆく。しかし大多数者は眠りの中に生まれ眠りの中に生き眠りの中に死んで行く (cf. *Plat. Resp. 534C*)。プラトンの洞窟の比喩 (*Resp. 514B*) を用いると、我々は洞窟の中に真実の太陽を背にして壁に向って座っており、壁に映る影を存在の全てだと想い、その中に生き、振り返って真実の太陽を見ることをしない。眠りの中に見る限りのものは眠り以外の何ものでもない。

またここに挙げたヘーラクレイトスの言葉が後世に万物流転の理論の展開に引用されるが (cf. *Plat. Cra. 401DE, The. 152DE*)、彼自身はそれらを用いて理論を展開しようとしたのではない。彼の永遠の今に醒めてへある体験がこのような表現を生み出したものと見るのがいいと

同じ川に我々は入って行くのであり、入って行かないのでもある。我々は存在するのでもあり、存在しないのでもある(断片四九 a)

と。一瞬として止まっているものは何一つない。いま我々が自分だと思っている存在も、次の瞬間にはもはや同じ自分ではない。自分と思っている自分の内なる魂も次の瞬間には既に変わっている(意識の変化を見ている)。しかもその魂は宇宙に遍在するものもろの魂の一つであり、それはまた、それらを統合する叡智ある宇宙を動かす大いなる魂(フュートンは神と呼ぶ Logos)の一部分として神の叡慮のままに(断片四二、七八、一一八参照)個を保ちつつ変化している(断片八八参照)。魂そのものもそっくりそのまま自分のものだとは言えない。私は存在するが私なるものは存在しないと云える。ものみな変化する、その変化の中に変化するがままに(神の叡慮のままに)生きるとき、変化することそのことがそのままに安らぎとなる「変化しながら休息する」(断片八四 a)のである。

二一 一 者

さて次に一者を考察するが、一つであるものとしてまず智(σοφία)を挙げる事ができる。

智は一つであり、それは万物を通して万物をどのように操ったかのグノーメ (gnōmē 叡慮) に精通している(断片四一)

とある。そして「グノーメーを持つのは人間ではなく、神の性格だ」(断片七八)とあり、また

智はただ一つ、ゼウスの名で呼ばれることを欲せず、また欲する(断片三二)

とある。ゼウスはギリシア神話における天候・社会秩序を司る最高神であるが、智はゼウスその人と呼ばれたくはないが、ゼウスのような最高神的存在で万物を操る叡慮に精通しているもの、つまり智は最高神に等しいものと言うのである。そして

私はその言うところを聞いた限りの人達のうち誰一人、智がすべてのものから隔絶したものだと思知するに至ってはいない(断片一〇八)

とあり、智はすべてのものから隔絶したものだと言う(智は神に等しい存在で、人間の思慮・思念からはかけ離れていて、現象界のすべてのものと同次的には捉え得ないものか)。それについては後々に考察する。

ところでこの智に深い関連を持ち神的な働きを持つものにロゴス(λογος)・火(πῦρ)・魂(ψυχή)がある。

ロゴスは全体を司り、あらゆるものに不断に関わりを持つ共通なもので(断片七二、二二)、「万物はロゴスによって生ずる」(断片一)とある。

また魂の存在にもロゴスは深く関わっていて(断片四五参照)、「魂には自己を増大させるロゴスが備わっている」(断片一一五)とあり、人間がよりよく生きようとする本性があるのもそのためだと言える。また

「思慮すること (σπουδαία) がすべてのものにとって共通のものとしてあり」(断片一一三)、「自己を知ることと健全に思慮すること (σωφρονεῖν) がすべての人間に与えられている」(断片一一六)とあるのも、人間の魂にロゴスが備わっているが故にと言うことができる(ここで思慮するとは単に考えることではなく、神的叡智に従って思慮する意である)。このようにロゴスは万物にあまねく共通の働きを持つものであり「共通なものには従わねばならぬのに、多くの人達は自分だけの(私的な)思慮を持っているように生きている」(断片二)、「ロゴスはこのようなものとしてい

つもあるのに、人間どもはそれを理解できないでいる、それを聞く以前にも聞いた後にも」(断片一)とある。そして

私にではなくロゴスに聞いて、万物が一つであると認めるのが智だ(断片五〇)

とあり、万物が一つであること、それを認めるにはロゴスに聞かねばならないこと、そしてロゴスを介して初めて智に触れ得ることがここに示唆されている。それらについての吟味は後々に譲って、次に火の働きを見ることにする。

この秩序ある宇宙世界(コスモス)はすべてのものにとって同じであり、神々の誰かが作ったものではなく、人間どもの誰かが作ったものでもなく、いつもあったし、いまもあり、これからもあるであろう、いつも生きている火(*fire always*)として、きまっただけ燃え、きまっただけ消えながら(断片三〇)

とある。ヘーラクレイトスは火を万物のアルケーとして火の濃密化と希薄化による万物の生成・消滅を見た。これは先人ミレートス派のタレース、アナクシマンドロス、アナクシメネースがそれぞれ万物のアルケーを水、ト・アペイロン(無限なるもの)、空気としたのを受け継ぐものだ。すなわち、火が結合し濃密化すると空気が生じ、さらに激しく圧縮されると水が生じ、最大限に圧縮されると土になる。逆に土が火によって弛緩すると水となり、水が蒸発すると空気になる。火は万物の構成要素として、ただ一つの基にある本質であり、万物は火を受け取ったり引き渡したりすることによって形成されたり分解したりする、火と万物は相互の交換物なのだとした(Simpl. Phys. 23, 33-DK 22A5 断片二六、七六、九〇参照)。そしてこの永遠の火を雷電(*Keraunos*)と呼んで

雷電が万物の舵を操っている(断片六四)

と言い、また「すべてのものには火がやって来て裁き捕らえるのである」(断片六〇)と言っている。火もまた万物を司る神的な働きを持つものなのである。

次に魂を「思慮を備えた蒸発気(*Evaporated soul*)として絶えず生成しているもの」(Arist. Did. ap. Eus. P. E. XV 20-DK 22B12)と捉らえ、魂から水、水から土、土から水、水から魂へと変換し(断片三六)、魂を少し潤わせると快適さをもたらすが(断片七七)、それを湿らせ(大人も酒に酔うと)年端もいかぬ子供に連れて行ってもらうことになり(断片一七)、さらに湿らせると魂は死んで水となる(断片三六)。逆に火によって湿ったものが乾き、冷たいものが暑くなって(断片二二六)、魂も乾いて光輝となるとき

乾いた光輝(*dry gleam*)は最も賢く最もすぐれた魂、乾燥した魂は最も賢く最もすぐれている(断片一一八)

とあって、魂も乾燥して光輝となるとき最も賢く最もすぐれたもの(智の本質)神的存在となる。

以上のところより一つであると言明されたものに智と万物があり、万物に作用する神的な働きを持つものに智のほかはロゴス、火、魂があり、これらは宇宙世界に行き渡っている。そして智はすべてのものから隔絶した存在で、ロゴスに聞いて初めてそれを認知し得るものであった。

この思想はタレースを始めとする賢者のものに相通するものがある。タレースは、万物(存在するすべて)宇宙世界は一つであり(DK. IIA13b) 生れてはじめて(*gignouros* 魂を備えたもの)宇宙を動かす神的能力

窓
が行き渡っていて、万物は神々、神靈^{ダイモイ}たちに満ちているとした(D.L.I
1.27, DK. 11A2, 23)。ヘーラクレイトスも万物はもろもろの魂と神靈^{ダイモイ}に
満ちていると言い(D.L.IX.11)。彼も秩序ある宇宙世界を智(叡智ある
魂)に溢れる一個の生物と捉えていたろうと考えられる。

結び付き……それは全体と全体でないもの、行くところの同じものと違う
もの、調子が合っているものと合っていないもの、万物から一つが一つか
ら万物が生ずる(断片一〇)

とある。存在するすべては内に対立相反するものを孕みながら相互に
関連し調和して一つの全体を構成している。その一つの全体にもろも
ろの(ロゴスを備えた)魂が息づき、一つの智(最も賢い最もすぐれた魂・乾いた
光輝)が全体を司っている。その智が万物の命(魂)をあずかり、その
一なるものから万物は生み出され、それぞれのものに魂をやどす万物
から一なる全体は息づいている。

ところで万物、つまり存在するすべて、森羅万象が一つだというこ
とは、まず火が万物の構成要素としてただ一つの基にある本質だとい
うところから、万物は火そのものの転換過程における諸相の表れだと
見るとき、万物は本質としてただ一つ火あるのみだと見ることができ
る。

他方、存在するものは全体として見ると一つだが、見方を変える
と、内に対立相反しながら調和を保つ存在が、思念に依じて分解し対
立相反の姿を表す。例えば、坂道は同じ一つのものだが、上れば上り
道、下れば下り道となる(断片六〇)。同じ円周上の一点が始発点とも
なり終着点ともなる(断片一〇三)。万物も全体として見れば一つだが、
視点を個々に移すと多となる。万物を一つと認めるのは「私にはな

くロゴスに聞いて」(断片五〇)であり、つまり沈黙(瞑想)においてであ
って、それは思考が絶え理性が消滅して永遠の今にある状態で、そこ
には思考・思念・判断・批判の入り込むスペースはなく(だから善悪・
美醜・正不正の区別なく)、常に今、一瞬々々ただ今にだけあるので、過去
なく未来なく時の流れなく、生死なく増減もない。また昼夜・冬夏・
戦争平和といった対立相反する観念・概念の生じる以前の、それらの
区別の未だない未分化の、つながり合ったもの、全体として一つで
へある状態である。永遠の今にへある存在するすべて、万物は一
つなのである。

この永遠の今における自然神祕主義的体験を前ソクラテース期の
多くの思想家たちはそれぞれに経て来た。

例えばパルメニデースは永遠の今における「ある」を次のように表現し
ている。「ある(εἶναι)は不生にして不滅、なぜならそれは全体として唯
一の(αἰῶνα πανορίσως)不動の終わりなきものであるから。またそれは
あったことなく、あるだろうことなく、今、すべてが一挙に、一つのも
の、つながり合うものとしてあるのだから」(Parmen. Fr. 8)と。明らかに
永遠の今の「ある」の体験を表現している。しかし彼はそこから出発し
て、「あるものはある」を唯一の正しい前提として論理世界へと展開して
行った。

またクロポォーンのクセノプァネース(Xenophanes 前六世紀後半)もホ
メーロスやヘーシオドスの擬人化した神々を批判して「もし牛や馬やライ
オンが手を持っていて、手によって描き、人間たちと同じような作品を作
ることができたら、馬は馬に、牛は牛に似た神々の姿を描き、それぞれ自
分たちの姿と同じような体を作ることだろう」(Xenoph. Fr. 15)とし、神
を次のようなものとした。「神は一つであり、神々と人間どものうちで最
も偉大であり、その姿においても思惟においても死すべきものどもに少し
も似てはいない」(Fr. 23)。「神は」全体として見、全体として考え、全
体として聞く」(Fr. 24)。「神は」(神は)勞する事なく、心の想いによってすべ

てを揺り動かす」(D. IX 85)、「神は」常に同じところ止まっていたり少しも動かない。ときにこちら、ときにあちらへと赴くことは神に相応しくなく」(Fr. 26)と、神についての抽象的論理的な思考を展開する。その際、神は一つであり、全体が見、全体が考え全体が聞くと言ふとき、そこに永遠の今における「ある」の体験を垣間見るが、神は不動であちこちと赴きはしないと言ふとき、そこには神を觀念化して定義づける思考が見られる。

ところがヘーラクレイトスは違っていた。永遠の今におけるへあるの体験を、すなわち存在するすべて(万物)を一なるものとしたが、それから理論を展開するのでもなく、また抽象化して神を觀念的に捉えようとするのでもなく、変化してへある存在するすべてをあるがままそのままに受け入れて、それを神とした。

神は昼夜、冬夏、戦争平和、飽食飢餓である。その変化するさまはちょうど(火が)香をくべられると、それぞれの香りに応じて呼び名が付けられるように(断片六七)

と。昼夜、冬夏、戦争平和、飽食飢餓と対立相反するものを内に孕み、それらの逆向きの力が互いに働き合いながら、また働き合うことによつて調和を保っている存在、この秩序ある宇宙世界そのものを神とした。

対峙するものが和合するものであり、もろもろの異なったものどもから最も美しい調和が生ずる(断片八)

どうして行き違っているものが自己の内に一致和合しているかを彼らは理解しない。逆向きに働き合う結び付き(調和)というものがある、ちょうど弓や堅琴の例に見るように(断片五)

と。万物を一と見る沈黙においては、存在するすべて(人間をも含めた大自然)は調和あり秩序ある宇宙世界で、美・善・正であるが、沈黙が乱れ人間の思考・思念が動くとき、内に対立相反しながら調和を保

っていた存在が分解し、それぞれの姿を現す。

神にとってはすべてが美であり、善であり、正であるが、人間たちがあるものを不正とし、あるものを正と考えた(断片一〇二)

と。「ヘーラクレイトスによれば、世界は時に従つて(κατὰ χρόνον)生成するのではなく思念に従つて(κατ' ἐνόημα)生成する」(Aët. II 4.3 DK. 22A10)とある。

もしそれらのもの(不正)がなかったら、ディーケー(正義)の名を彼らは知らなかったであろう(断片三三)

病氣は健康を、飢餓は飽食を、疲労は休息を快適にし善いものにする(断片一一)

と。ヘーラクレイトスは常に変化して止まない万物を生成へと向かわせる力を戦い(ἐρίων)と争い(μάχης)と見、逆に消滅へと向かわせる力を協調(ἁρμογία)と平和(εἰρήνη)と見た(D. L. IX 87)。

知らねばならぬ、戦いは共通のものであり、正道は(ἀρετή)争いであつて、万物は争いと必然(ἀνάγκη)に従つて生成することを(断片八〇)

戦いは万物の父であり、万物の王である。それはある者たちを神々とし、ある者たちを人間として示現した。またある者たちを奴隸とし、ある者たちを自由人とした(断片五三)

彼(ヘーラクレイトス)はそれ(全世界を支配する火)を「欠乏と飽満」と呼ぶ。彼によれば秩序ある世界の形成が「欠乏」であり、世界焼尽(ἐκπύρωσις)が「飽満」であると(断片六五)

宇宙世界を支配する火は万物との交換物として万物を生成・消滅してゆくが、そのとき欠乏のあるところに充足せんと戦いの気概を生み出し、万物を創造形成へと向かわせ、他方飽満のあるところは満ち余つて創造の意欲なくひたすらに焼尽へと終息してゆく。「人間にとって何でも欲するままになることは余り良いことではない」(断片一一)

窓 ○)と。そこは戦いへの気概・創造への氣力を欠く(断片二二六b参照)。

史 期待するでなければ期待され得ないものを見出し得ないだろう。それ
は見出し得ないもので到達し得ないものだから(断片一八)

と。創造の世界、それは未だ誰も見たことも考えたこともないその人
独自の形成の世界であるから、そこに強靱な意欲を持って期待するの
でなければ、それは見出し得ないし達し得られないものなのだ。「も
ろもろの榮譽は神々をも人間をも、奴隷に落とす」(断片一三三)と。榮
譽を獲て、それに酔い、戦いへの気概を失えば、神々をも人間をも奴
隷に落とす。創造への気概、それは今ここに醒めて自己自身であるこ
と、それがどのようにであるかが人間を神々とし人間とし、自由人と
し奴隷とするのである。

おわりに

神に等しい一なる智(σοφία)と人間の知恵(σοφία)とについて若
干の考察を加え、そこよりヘーラクレイトスの実生活の側面を垣間
見ることをもってこの稿を終えたい。彼は自己自身を探索した。自己
自身とはプラトーンが論述するように魂であり(Plat. Alc. I 128ff.)、彼
も肉体よりも魂を重んじ、魂の浄化を求め、ディオニューソスの密儀
にも心を寄せた。しかし多数者の宗教的所業には敵しい批判の眼を向
けた(身を清めるといっても新たな血で汚してのこと、ちょうど泥にはまった者が泥で
洗い流そうとしているように。またそこらの御神像に祈るのも、まるで堂宇に話しかける
ようにだ。彼らは神々が何であり、英雄が何であるかをちっとも知っていないのだ 断片
五)。だが神託の背後には神の存在を見た。

シビュラ(Sibylla)巫女は狂った口で笑いもなく飾りもなく滑らかさま

ない言葉を吐き、その声をもって千年の外に達している、それは神を通し
て語るからだ(断片九二)

と。神の智は人間の思慮・思念からは隔絶した存在なのだ(断片一〇八
参照)。

人間のうちで最も賢い者でも神と較べると猿に見えるだろう、智におい
ても美においてもその他のどの点においても(断片八三)
と。この隔絶した智に対して人間の知恵とは何か。

健全に思慮すること(εὐλογεῖν)が最大の徳性であり、「プュシスに」
耳を傾けながらプュシス(σοφία)自然本来・本質に従って真実(ἀλήθεια)
を語りかつ行うことが知恵(σοφία)である(断片一二二)

と。我々が智に接し得るのはロゴスに聞いてであり(断片五〇参照)、そ
れは沈黙においてであったが、プュシスに耳を傾けてその声を聞くの
も沈黙にあって始めて可能なのであり、また健全に思慮することも
(沈黙において)神の叡智に従って思慮することであり、永遠の今に醒め
てあるときに獲られる理解の蓄積がノオスを持つに至るのであった。

人間の知恵は沈黙の内に醒めてあるとき獲られるものなのだ。それに
対して博識は、(自分自身ではない)他者の(今ここにおいてはではない)過去の
知識の蓄積であり、真実(今ここにあるがままの自己自身)から生み出され
るものではないから、ヘーラクレイトスは博識を虚偽と見た(断片八
九、一二九参照)。

ところでプュシスは、それぞれのものにそれぞれのプュシスがあ
り、牛には牛の(断片四)、豚には豚の(断片一三、三七)、魚には魚の(断
片六一、九参照)、そして人間には人間の、また各人それぞれにそれぞ
れの本質・役割がある。その本質(自己自身)に従って本質を生きたること、
それが知恵なのであった。そのために自己の本質を知り、それを探索

しなければならぬ。つまり多くのものごとの探求者であらねばならぬ(断片三五)。しかし多くの土を掘っても獲るところは僅かである(断片二三参照)、本質は実に捉え難い(プュシスは隠れることを好む 断片二二)。それでもプュシスに耳を傾けプュシスに従うとは、どうすればよいのか。それは自己の本質を観念的に捉えてというのではない。沈黙において本質に触れ、つまり沈黙の内に感覚的に内なる自己と調和しているのを感じながら(つまり醒めていて)、真実(今ある自己自身)をあらのままに語りかつ行うのが知恵なのだ。

その場合、感覚的に内なる自己と調和しているのを感じながら(つまり醒めている)といっても、それは我意に陥りはしまいかと危ぶまれるかも知れない。しかし沈黙においてプュシスに耳を傾けると、或いはロゴス・ヌクスに接するとき、それらの声には信頼を置いていいのだ。それはソークラテースがダイモン(指導霊)の声を聞くとき、何かをせよというのではなく、してはいけないというのであったように(Plat. Ap. 31D)、その声は概して直感という形をとるが、ヘーラクレイトスも言う。

ノオスの助けを受けて語らんとする者は万物に共通するものに確たる信頼を置かねばならない、ちょうど市民国家が法に対するように、いな、それよりもずっと強力に。なぜなら人間の諸法はすべて一なる神の法によって養われているからだ。すなわち神のそれはどこまでも意のままに支配し、すべてのものを充してなお余りあるものなのだ(断片一四)

と。ここに示唆されているのは、我々が沈黙において受け取るノオス・ロゴス・プュシスの声は、人間の法が一なる神の法によって養われているように、一なる神の智によって養われているということなのだ(目に顕わでない調和は顕わなものより強力だ(断片五四)とあり、「神的事柄

の多くは)信じる気持ちがないので知られることなく見過ごされている(断片八六)とある。信じるごとの意味を見るべきなのだ。

また智は沈黙時にロゴスに聞いて接し得ると先に我々は見たが、「ヘーラクレイトスによれば、我々は呼吸を通じて(*di' aurothōs*)この神的なロゴスを吸い込むことによって知的(*noētoi*)になり、そして眠りの内にあるときは忘却しているが、醒めているときに再び思慮ある状態(*thupōnes*)になる」(Sext. ad. math. VII 129-DK 22A16)とある。そして「人間は知的(*logikoi*)ではなく、ただ周囲を取り巻くもの(*to periechon*)のみが^{知性}知恵ある思慮を持つもの(*gnōtōnes*)である」とヘーラクレイトスははっきり述べている」(Ibid. 127)とある。

すなわち、もろもろの魂とダイモンは万物(森羅万象)に満ちており、魂にはロゴスが備わっているから、ロゴスは我々の周囲を取り巻く森羅万象に満ち満ちている。そのロゴスを呼吸を通じて吸い込むことによって知的になるというのである(ハタ・ヨーガにおける調息・調心を連想する)。

また魂は思慮をそなえた蒸発気として絶えず生成しているものと捉えられ、「もし万物が煙となることがあれば鼻がそれを識別するであろう」(断片七)とあり、また「魂はハーデースでは見覚を働かす」(断片九八)とある。つまりハーデースは死後の世界であり、肉体のない魂の世界であり、顕在意識ではない内在意識の世界であって、沈黙時の魂の世界なのだ。そのとき魂(内在意識)は見覚を働かすとある。

すなわち、沈黙において醒めてあり、周囲を取り巻く森羅万象に充満したロゴスを吸い込むとき(人間は知的になるが、そこには万物の構成要素としての火は最も根源的な生命そのものとしての姿を顕わし、最も賢い最もすぐれた乾いた魂、乾いた光輝、一なる智、神そのもの

(存在するすべて)が光輝に満ちる(断片二一八)。一なる智に養われて宇宙世界に遍在するロゴス、ヌスは最善に働き、それぞれのプュシスは最も良く自己自身を顕現する。森羅万象(神)はあるがままに顕現し、変転し、瞬間々に芳香をもってその姿を現す(断片六八参照)。鼻はロゴスを吸い込み、ノオスを持つに至る。万物が一としてへあるとき存在するすべて(神)は美・善・正であり(断片二〇二)、自然界・人間界にいかなる偽りも不正も見過ごされることはない(断片二八、六六、九四参照)。今ここにあるがままに醒めてあるとき、一時も動いて止まない変転する宇宙世界はあるがままプュシスのままに(創造するもの・戦うものとして)神の叡智のまま、動の世界は動のままに安らぎ(歡喜)に満ちる(断片八四a)(私には一人でも万人に当たる、もし最高の者であれば断片四九)。

眠っている者のように言ったり行ったりしてはならない(断片七三)

註

- ① 前ソクラテース期の哲学者に関する著作断片は H. Diels-W. Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker I Bd, 1954 Berlin* (ソクラテース以前哲学者断片集)『岩波書店一九九七年』による。ヘーラクレイトスの邦訳には他に田中美知太郎(『ギリシア思想家集』筑摩書房 昭四〇年)、広川洋一(『ソクラテース以前の哲学者』講談社 昭六二年)がある。本論中(断片X)とあるのはすべてヘーラクレイトスの断片番号を示す。
- ② 新プラトーン哲学の祖プロティノス(Plotinos 二〇五―七〇年)は「上り道と下り道は同じ」のもの(断片六〇)とか「変化しながら休息する」(断片八四a)というヘーラクレイトスの言葉を挙げて、彼はこれらの意味を明らかにしないままに放っているが、それは恐らく彼自身が探求して見出したように、我々も自分で探求すべきであると考えたからである(Plotin. *Enn. IV 8.1*)。

③ 賢者については、拙稿『賢者の知恵』(京都女子学園仏教文化研究所「研究紀要」二六号 昭六二年)参照。

④ チャネリングについては、ジョン・クリモ『チャネリング』I・II、ウォイス 一九九一年参照。

⑤ Talks with Sri Ramana Maharshi, Sri Ramanasramam, Tiruvannamalai 1978

⑥ プラトーン思想の理解に関しては、拙稿『サップォー試論—プラトーンの理解をとおして—』(京都女子大学史学会「史窓」一九八三年)参照。

⑦ *Miraculous Fragments of an Unknown Teaching, 1983 (A. D. ヴァズンスキー『奇蹟を求めて—グルジェフの神秘宇宙論—』浅井雅志訳 平河出版社 一九八一年)参照。*

⑧ プラトーンによって賢者と名指された(Phdr. 238B) 関秀詩人サップォーIの表現にも醒めてある者の目を見る。例えばその《発作》(Sappho fr. 31 Lobel-Paepe/Diehl)に、「あの方(男性)がわたしには神々に等しいお方に見えます、おまえ(女性)に向かって座り、おまえの甘い声を近くで聞いていらっしやる、うっとりするおまえの笑いをも、それがまことわたしの心を胸内にかき乱したのです。そう、おまえを見ると一瞬もうわたしには言葉がありません、いいえ、舌はこわれ、ほのかな炎がすぐさま肌の下を流れて目は何も見え、耳はぶんぶん鳴ります、冷たい汗がおおい、震えが全身をとらえます、草よりわたしは蒼白いのです、ほとんど死んでいるかに見えます、けれどもすべて耐えねばなりません……」

⑨ ヘーラクレイトスは「万物はもろもろの魂とダイモーンに満ちている」と言ったといわれる(D.L. IX.17)。そしてダイモーンとは、神と人間との中間の存在でその仲介者(守護霊・導き手)である。誰であれ優良な人がこの世の生を終えると、大いなる報償と栄誉を獲てダイモーンになると昔から言われているとある(Plat. *Crat. 398B*)。ヘーラクレイトスにおける魂に関しては稿を改めて更に考察したい。

(二〇〇〇・七・七脱稿)